

## 行信不二(ぎょうしんふに)、二種一具(にしゅいちぐ)の法門

### 一、表裏一体

去る五月十七日には降誕会<sup>ごうたんえ</sup>・キッズサンガを営みました。「キッズサンガ」とは如来様に見守られてお育てに与る子供さんたちの和やかな集いという意味であります。次代を担う子供たちが如来様に見守られてお育てに与るように努めるのは僧俗に課せられた重大な使命であります。

当日は大変有難いことに北小松の子供達が十四名(去年は七名)も集まってくれました。ご門徒のお子達がお友達を誘ってくれた御蔭です。

早くから準備に携わって戴いた総代長様、世話方様、仏教壮年会の役員様、仏教婦人会の役員様大勢の方々のお気持ちが一つになってのそれは素晴らしい営みだったと振り返ることができます。昨年始めたばかりの営みですから一つ一つ手作りで積み上げたことがよかったです。

降誕会は最初に子供さんたちの手で献花・献灯・献香・伝供の儀式をおごそかに営み、続いて、らいはいの歌のお勤めを致しました。

御客僧には野洲組の御厨得雄師<sup>みくり</sup>をお招きしました。御厨師は二週間に一度は日曜学校を開催なさる大変熱心なお寺様であります。

ご法話は、大変判り易いお話でしたので、当日ご出席の御同行にも好評でありました。ご法話は「不二」と「共命鳥」についてお話戴きました。

まず、不二(ふに)をお話なさるに当って、御厨師は懐から千円札を出されました。お札には表面と裏面とがあります。表にも千円、裏にも千円と表示されていますが、表の千円と裏の千円を合わせて二千円として使うことはできません。また、表や裏だけの千円札では現実に通用しません。

リビングライブズー「行信不二、二種一具の法門 共命鳥」

どちらか一面ではお札の体をなさないからです。世の中に通用するお札は表裏一体で千円の値打ちがあるということになるのであります。

### 二、如来様から賜るお念仏の信心は、念仏と信心が一体のもの

浄土真宗は、阿弥陀如来から賜る信心一つによってお救いに与ります。そうするとお念仏がどこかに行ってしまったように思われますが、実はお念仏と信心の二つは別ものでも離れて存在するものでもありません。

阿弥陀如来はその昔、日々煩惱にさいなまれ迷界を抜け出る力のない衆生を浄土に迎え取って救いたいとの御心から、御本願をお建て遊ばし、今や南無阿弥陀仏のお名号となって仕上がって下さいます。

このお名号の南無の二文字は如来様の本願招喚の御喚(よ)び声であるお心が込められてあり、如来様はこのお名号を称える大行を衆生の行として与えて下さるのです(六字釈、発願回向のお心、註 P170)。それ故、私が南無阿弥陀仏と称えるとき聞こえて下さる南無阿弥陀仏が如来様のお声になって私を喚び覚まし続けていて下さることになります。

これに従って、私たちは「左様でございますか、如来様が声になって呼んでいて下さるのであり、如来様が願うていて下さるのですから、仰せの通りにお浄土に生まれたいと願わせて戴きます」となるのであります(銘文、発願回向の御心、註 P655)。

もともと「如来様の仰せの通りにお聞かせに与る」というのが浄土真宗の十八願の信心でした。ここで如来様は既に念仏を衆生の行として与えて下さるのですから、「仰せの通り」ということは念仏抜きではありえないことになります。それ故念仏と信心とは、本来一体で離れて存するものではないというのでこれを<sup>ぎょうしんふに</sup>行信不二とも<sup>ぎょうしんふり</sup>行信不離とも申しま

す。したがって、信心獲得のプロセスは、如来の仰せのままにお念仏している姿を指すのだということになるのであります。

こうして、如来様の仰せを仰せのとおりに如実に(あるがままに)お聞かせに与れば、如来様のまことのお心がわが胸に宿って下さいます。

仰せにお任せすれば、如来様の真のお心(その本体はお名号)がお宿り下さるのであって、これが凡夫が賜る信心になるのであります。

この如来様から賜る(他力の)信心の構造について、浄土真宗の七高僧の一人でいらっしゃる善導大師様は観經の深信(じんしん)の釈をなさって、次のように明らかにして下さったことであります。

実は、信心というのは、私をお救い下さる阿弥陀様の働き・本願力は「浄土往生間違いなし、なんと有難いことよなあ」と頂戴する心が一つ、そのようなお救いの働きを頂戴する私自身を振り返ると「何と愚かなお恥ずかしいことよなあ」と頂戴する心が今一つであります。

前者を法の深信(じんしん)、後者を機の深信(じんしん)といい、浄土真宗の信心というのは、その何れか一方ではなく、両者が丁度一枚の紙の表と裏のように表裏一体に揃ったものだとおっしゃったのです。

そこでこれを二種一具(にしゅいちぐ)の法門と称するのであります。

### 三、共命鳥(ぐみょうちょう)のお話

仏説阿弥陀経をひもときますと、極楽には共命鳥という鳥が棲んでいると説かれています。これは、頭が二つある鳥であります。この鳥が迷いの世に居る間は、二つの頭はお互いに大変仲が悪かったのだというのです。あるとき一方の頭が策略を講じて今一方の頭に毒を飲ませました。「しめしめ」といって策略を講じた頭は喜んだそうです。

リビングライブズー「行信不二、二種一具の法門 共命鳥」

けれども他方の頭が飲んだ毒はやがてお腹から吸収され毒が体中に回って、毒をのませた方の頭も諸共に死んでしまったのだそうです。

阿弥陀如来はこの姿をご覧になって哀れにお思いになりました。それ故、そのような悪鳥を我が国浄土に迎え取って救いたいと思し召しになり、爾来、共命鳥は極楽浄土に棲む鳥となったのだというのです。

さて、極楽ではどうして共命鳥は生きることができるようになったのでしょうか。極楽に生まれてからというもの、かつて娑婆世界にいたときは異なって、頭は二つでも一羽の鳥であることに気付かせて戴くまでにお育てを与り二つの頭は互いに他方の気持ちをおもんぱかるようになったというのであります。それからというもの、それまで見ることも聞くことさえも叶わなかった世界が開かれて参りました。

そればかりか、日々出会う極楽の住人達をきれいな鳴き声で楽しませることができるようになったと言われています。こうして、極楽の共命鳥は鳴き声の素敵な極楽に棲む鳥の代表名詞になったというのです。

私たちが如来様から一つの尊い命を頂戴しているのにまだまだ未熟な間は相手の人の気持ちが判りませんから、お互いに悪口を言って相手を苦しませ、やがて回り回って自分自身も苦しむようになっているのですが、共命鳥のお譬えに導かれて、小さな自分の殻に閉じこもらず、自らの枠組みを広げてお育てに与って行きたいものです。合掌(玄宥記)。

正覚寺永代経 六月二十日十四時、二十時、お客僧 岡 玲師  
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より  
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より  
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)  
〒五二〇 〇五〇一滋賀県大津市北小松四五二番地 ☎〇七七 五九六 〇一九六  
FAX 〇七七 五九六 〇一九七 ☎-ℓ・mhkatata@mx.scn.tv 使務 堅田玄宥  
HのOΠ入ホミハ入L長一イク一ハ <http://www.isoreed.net>

平成二十一年五月十九日初版発行、二十一年五月二十三日五訂版 2